Book Review 36-16 暗殺者　＃暗殺者

『＃暗殺者（上）（下）』（ロバート・ラドラム著）を40年ぶりに再読した。著者は舞台活動・劇場主を経て、作家業に転身。著者の没後に、代表作「ジェイソン・ボーン」三部作（『暗殺者』、『殺戮のオデッセイ』、『最後の暗殺者』）はマット・デイモン主演で映画化、世界各国で大ヒットした（ストーリー構成は大幅な改編）。

本作は、記憶を失った男の闘いを描くスパイ・アクションである。嵐の海から瀕死の重傷で救助された男は、一切の過去の記憶をなくしていた。残されたわずかな手掛かりは体に。それは、整形手術された顔、コンタクト・レンズ使用痕、頭髪の染色跡、身体に埋めこまれていた銀行の口座番号。自分の正体を知るために数少ない手がかりに接近する。その過程で、記憶は蘇らないのに、体は武闘家のように反応し、悪事に通じていていた（金持ちの侯爵を脅迫して、莫大な金額を手に入れるし、自分の顔を知っているホテルマンを誘導して名前を聞き出したりする手口）。そして、終に自分は有名な暗殺者カルロスを超えようとする新人カノンという暗殺者らしいと察する。
　ボーンはピンチに巻き込まれた際、カナダ人の女性経済学者Ｍを人質にとってしまう。ボーンがＭを開放したあとでＭが敵に拉致される。そのピンチに陥った危機一髪の瞬間に駆けつける。それを契機に二人は一緒に行動する。その後、恋愛感情が芽生えるのか？
後半、カルロスにボーンは狙らわれて次から次へとピンチが訪れるし、彼の正体も二転三転する。果たして、ボーンは本当に暗殺者なのか？そして、記憶を取り戻すことができるのか。本書の謎をまとめると、そもそもジェイソン・ボーンの正体は？　暗殺者カルロスの暗殺目的は？一体誰がボーンの味方なのか？　そして、カルロスの秘密のネットワークは何か？　その先に最も巨大な謎が浮かび上がってくる。

一度読んだのに忘れてしまった結末に辿り着こうと、ページを捲る手が早まる。